

平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金
(障害者対策総合研究事業 精神障害分野)
「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達の变化」:
地域ベースの横断的および縦断的研究

分担研究

幼児期における発達障害の有病率と関連要因に関する研究

研究協力報告書

地域 5 歳児母集団内の自閉症的行動特性と精神医学的ニーズとの関連性

研究協力者 河野 靖世 (東京医科歯科大学医学科, (独) 国立精神・神経医療研究センター)
飯田 悠佳子 ((独) 国立精神・神経医療研究センター)
小松 佐穂子 ((独) 国立精神・神経医療研究センター)
森脇 愛子 ((独) 国立精神・神経医療研究センター)
研究分担者 神尾 陽子 ((独) 国立精神・神経医療研究センター)

研究要旨

近年、自閉症スペクトラム障害 (autism spectrum disorders: ASD) 児は一般児童の 2-3% を占め、その多く未診断で存在すること、そして高頻度に情緒面や行動面の精神症状を合併することなどが明らかになってきた。このような合併は QOL を低下させる要因になるため、ASD の併存症状をターゲットとする早期発見と適切な治療介入が必要である。そうした早期発見・早期支援を実現するシステム構築には疫学的エビデンスが必須であるが、我が国には就学前幼児についての疫学的エビデンスは存在しない。本研究では、地域の一般 5 歳児集団を 1028 名対象として、情緒や行動の問題が ASD 特性の高い幼児に偏在してみられるのか、そうであれば、その情緒や行動の問題の特徴は ASD 特性の低い幼児とどのように異なるのか、について明らかにするために、我が国で標準化された評定尺度を用いて検討した。その結果、SDQ の合計および下位尺度得点の平均の比較、上位 10% および 20% で切り取った高得点群の割合、さらには個人内で高得点を示した領域の広がりからも、ASD 特性が一定程度以上強い幼児では臨床閾、閾下ともに情緒、行為、多動・不注意といった全般的な精神症状が一定レベル以上の水準にあり、また広範囲にわたって困難を示していることが示された。これらより、ASD に併発する精神症状の出現はこれまで考えられてきたよりも早期から、また閾下も含む多数の幼児に生じている可能性が示唆された。閾下群を含めた ASD 特性のある幼児に対して、包括的精神医学的アセスメントが重要であることが強調される。

A. 研究目的

自閉症スペクトラム障害 (autism spectrum disorders: ASD) は生後 1 - 2 年で発症し、生涯持続し、その社会生活への影響は甚大であるため、早期発見、早期介入が極めて重要な発達障

害の一症候群である。ASD 児は中核症状による困難のみならず、不安障害や気分障害、注意欠陥多動性障害などの精神障害を高頻度に合併することが英国の疫学研究 (10 - 14 歳)、縦断研究 (12 - 16 歳) をもとに報告されている

(Simonoff et al. 2008, 2013)。さらに、このような合併精神障害の存在は、QOL の低下を招く要因の一つとされている(Kamio et al., 2012)。ASD 児の大部分を占める高機能 ASD 児の多くが、未診断・未治療である(Kim et al. 2011)という現状を考えると、ASD 児が治療可能な精神障害を合併している場合に、そのことに周囲に気付かず、適切な医療サービスを受けられていないケースが多いのではないかと推察される。実際には、通常学級に在籍する平均以上の知能を有する ASD 児の場合、就学後に学校で発達の違いに気づかれ、特別な教育ニーズの発見につながることも増えてきた。合併の多さを考慮すると、合併精神障害の兆候についても、学校での発見と初期対応、そして速やかな医療連携が可能となれば、慢性化や重症化を回避し、より早い回復が期待できると考えられる。

ASD や精神障害の症状について、その閾値を基準に診断の有無を判断するカテゴリー分類はその根拠が乏しくなっている。ASD で明白なように、症状分布は連続しており、支援サービスの観点からは、診断の有無よりも症状のディメンジョナルな評価がよりニーズに即している。我々は、これまでに日本人の子どもの全国データに基づいて、ASD 症状の評価尺度として対人応答性尺度(Social Responsiveness Scale : SRS)、精神症状の評価尺度としては子どもの強さと困難さアンケート(Strengths and Difficulties Questionnaire : SDQ)、をそれぞれ標準化した。いずれもカットオフに基づいて、臨床群の分類が可能であるのみならず、臨床閾下の症状をも拾うことができる点で研究および臨床で有用で、国際的に広く用いられている。

全国の小・中学校通常学級の児童生徒(n=24728)を対象とした先行研究(神尾ら、<https://www.jspn.or.jp/journal/symposium/pdf/jspn107/ss611-617.pdf>; 森脇ら, 2013)では、同様の問いに対して、親回答の SRS と SDQ を用いて次のような結論が出されている。すなわち、ASD 的特性の高いハイリスク群(ほぼ診断

閾群に相当)では、その約 6-7 割がニーズの高い情緒の問題(得点の高い方から 20%)を抱えており、半数近くがニーズの高い行動面の問題(得点の高い方から 20%)を抱えている、と推測された。ASD の診断閾には入らないが軽・中程度の ASD 特性をもつ群では、約 3 割の子どもが情緒または行動の問題を抱えているとされた。一方、ASD 特性のほとんどない群では、情緒あるいは行動の問題は 1 割に満たない少数例にのみ存在した。こうした情緒や行動の問題の頻度は、ASD 特性の程度で有意に異なっており、ASD 特性と精神症状の密接な関連が示唆された。この結果が就学前の幼児にもすでに認められるのであれば、合併症状に対する早期支援は就学前に開始する必要があるが、国内外で就学前幼児に関する ASD の合併症状についての疫学的知見は筆者の知るところ、存在しない。

本研究は、就学前の 5 歳児における ASD 行動特性と精神症状の関連について、就学児童と同様のパターンがみられるのかどうかを明らかにするために、一昨年度(本研究の初年度)収集された地域の幼児集団(約 3000 名)の SRS と SDQ のデータをもとに行われた。

B. 研究方法

1) 対象

北多摩北部地域の保育園・幼稚園に在園する(年中児、4~5 歳)を対象として、園を介して 2012 年 2 月 1 日~2012 年 3 月 14 日に児の保護者に質問紙を配布し、調査協力を依頼した。そのうち、有効回答が得られた保護者回答 1028 名と、担任回答 347 名を今回の解析対象とした。調査手続きの詳細は、H23 年度の報告書(神尾ら, 2012)で既述されている。

2) 質問紙

対象児の保護者、担任から以下の 2 種の質問紙のそれぞれ親用、教師用の回答を得た。

対人応答性尺度(Social Responsiveness Scale; SRS)

Constantino ら(2005)により開発された、ASD 的行動特性/症状の程度を定量的に測定する尺度である。4 件法で評価し、合計得点を算出する。得点が高いほど ASD 的行動特徴を強く持つことを表す。SRS 日本語版の信頼性と妥当性は確認されている(神尾ら, 2009)。この尺度を用いて、一般集団において ASD 的行動特性が連続的に分布し(Constantino & Todd 2003; Kamio et al., 2013)、ASD 診断閾下となる者が多数存在することが分かっている。日本人集団で標準化された T 得点により ASD Probable 群(T 76) ASD Possible 群(75 T 60) ASD Unlikely 群(T 59)の3群に分類するめやすが原著者らによって提案されており、本研究ではこの群分け基準を用いて、対象を3群に分けた(神尾ら, 2013; 飯田ら, 2014)。

Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ)

Goodman によって開発された、幼児期から青年期までの適応と精神的健康の状態を包括的に把握するための質問紙である(Goodman, 1997)。5つの下位尺度(情緒、行為、多動・不注意、仲間関係、向社会性)によって構成され、3件法で評価する。情緒、行為、多動・不注意、仲間関係の合計得点で、総合的な困難さを表す Total Difficulties Score (TDS) を算出する。向社会性は得点が高いほど適応が良く、その他の下位尺度と TDS は得点が高いほど適応が悪いことを意味する。SDQ 日本語版の信頼性と尺度構造の妥当性が確認されている(Matsuishi et al. 2008; Moriwaki & Kamio, 2013)。下位尺度と TDS それぞれにおいて、適応が悪い方から 10%, 10%, 80%を切り取るようカットオフ値を設定し、それぞれ High Need, Some Need, Low Need といった要支援の程度で群分けするのが一般的とされている。

3)統計分析

まず SRS 回答結果から、SRS 得点を5歳児集団において標準化し、T 得点を算出した上で、SRS マニュアルが推奨する2つのカットオフ値(T 得点 60 点と 76 点)で被験者を3群(特性の高い方から、ASD Probable, ASD Possible, ASD Unlikely)に分類した(**エラー! 参照元が見つかりません。**)。これらの3群について、SDQ 下位尺度と TDS に関して、臨床ニーズの高い、すなわち得点の高い方から(向社会性は低い方から)それぞれ約 10%、10%、80%となるようにカットオフ値を設定し(飯田ら, 2014) 順に High Need、Some Need、Low Need の3群に分類した(表3)。

このようにして定義された ASD-3 群のそれぞれにおける、SDQ の5下位尺度(情緒、行為、多動・不注意、仲間関係、向社会性)と TDS (Total Difficulties Score)の得点の平均値と標準偏差を求めた。次に ASD-3 群で、SDQ 下位尺度プロフィールに違いがあるかどうかを調べるために、SDQ の3つの下位尺度得点(情緒、行為、多動・不注意)を従属変数として、ASD-3 群(ASD Probable, ASD Possible, ASD Unlikely)を被験者間要因に、SDQ の3下位尺度の種類を被験者内要因として反復測定2元配置分散分析を行った。SDQ 下位尺度のうち、仲間関係・向社会性の2項目は自閉症症状と強い相関があるため(Goodman, 2010; Moriwaki & Kamio, 2013) これらを除いた3項目を要因の水準とした。前述の ASD-3 群別にみて、SDQ の5下位尺度と TDS 毎の High Need, Some Need, Low Need の3群、また Some & High Need, Low Need の2群の人数と割合が異なるかどうかを調べるために、親回答、担任回答のそれぞれについて χ^2 検定を行った。下位検定にはボンフェローニの有意水準調整を用いて多重比較を行った。最後に、対象児が Some Need または High Need を有する SDQ の下位尺度数をカウントし、ASD3 群ごとにその累積相対度数(%)を求めた。

全ての解析には IBM SPSS Statistics 21 を用いた。

(倫理面への配慮)

本研究は全て、疫学研究に係る倫理指針に基づき、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得て行った。回答は全て無記名で個人を特定可能な情報は一切含まれていない。

C. 研究結果

1) 記述統計

表 2 に、評定者別の ASD3 群それぞれにおける、SDQ 下位尺度(情緒、行為、不注意多動、仲間関係、向社会性)と TDS の得点の平均値と標準偏差を示した。

2) ASD3 群別の SDQ 下位尺度プロフィール

保護者評定による SDQ 得点下位尺度プロフィールを図 1 に、担任評定によるものを図 2 に示した。

いずれの評定者による結果も、ASD 群と SDQ 下位尺度の交互作用が有意で($p<.001$)、すなわち ASD 特性の程度によって SDQ 下位尺度プロフィールは異なっていた。SDQ 下位尺度要因の各水準において、SRS 群要因の単純主効果が有意であった($p<.001$)。多重比較の結果は、以下の通りである。

保護者評定

情緒： Probable>Possible($p<.01$),

Probable,>Unlikely($p<.001$)

Possible >Unlikely ($p<.001$)

行為： Probable>Unlikely ($p<.001$)

Possible>Unlikely ($p<.001$)

多動・不注意: Probable>Possible ($p<.05$)

Probable,>Unlikely($p<.001$)

Possible >Unlikely ($p<.001$)

担任評定

情緒： Probable,>Unlikely($p<.001$)

Possible >Unlikely ($p<.001$)

行為： Probable,>Unlikely($p<.01$)

Possible >Unlikely ($p<.001$)

多動・不注意： Probable,>Unlikely($p<.001$)

Possible >Unlikely ($p<.001$)

以上より、保護者および担任評定による SDQ の各下位尺度の得点は、ASD 群別で有意に異なっていた。しかしながら、保護者評定の行為の問題、そして担任評定の情緒、行為、多動・不注意のすべてにおいて、ASD 特性の高い 2 群間で有意差は認められなかった。したがって、とりわけ教師の評定では ASD 特性の高い 2 群はその精神症状のニーズにおいて必ずしも区別されないことがわかった。

3) 自閉症的特性の程度と精神医学的ニーズを抱える割合

SDQ 各下位尺度と TDS の特定を Need の程度に分けて、ASD 群別にその人数と割合を示した。表は、SDQ 得点を High, Some, Low の Need による 3 群に分けた結果を示し、表 3、表 4 は、Some & High Need と Low Need の 2 群にわけた人数と割合を示した。

保護者評価、担任評価共に、ASD Probable 群では全体的な困難さを表す TDS に関しては 8-9 割が High Need を、下位尺度においても約 4-8 割が High Need を有することがわかる。また表 3、表 4 からわかるように、Some Need を含めると、ASD Probable 群のほぼ全員が TDS で、また 5 - 9 割がいずれかの下位尺度で Needs を有していた。一方、ASD の特性がほとんどない ASD Unlikely 群では、TDS、全ての SDQ 下位尺度ともに 8 割近くが健常な範囲であった。

ASD3 群と SDQ2 群 (Low Need 群と Some & High Need 群)の関連を統計学的に調べた結果、保護者、担任のいずれにおいても、分布に有意な偏りが認められ、ASD 特性が強い幼児は、そうでない幼児よりも情緒または行動面の問題を有し、支援ニーズが高い傾向があることが示された。多重比較の結果からは、ASD Unlikely 群と他の 2 群は担任評定の行為を除くすべての

領域においても有意に分布が異なっていたが（担任評定の行為の問題は Unlikely 群は Possible 群とでのみ有意差あり）、仲間関係と保護者評定の TDS を除くすべての領域において、ASD Probable、Possible 群間には分布に有意差が認められなかった。このことから、ASD 診断の有無にかかわらず、診断閾下に相当する一般幼児も閾値の幼児同様、高い臨床ニーズを有する児が高率に存在する可能性があることが明らかになった。

4)個人内での困難領域の広がり

表 5 は、Some Need または High Need の範囲にある下位領域をいくつ持っているかに注目して、個人内の精神医学的問題の範囲の広がりを、ASD 群別に累積相対度数で示した。ASD Unlikely 群の約 8 割がニーズのある領域が 0 あるいは 1 つであったのに対し、ASD Probable 群は保護者評定では 4 割近く、担任評定では 6 割近くもの児が 4 つあるいは 5 領域全てで、そして全員が少なくとも 2 つ以上の領域でニーズを抱えていることがわかる。診断閾下に相当する Possible 群も 2 割を超す幼児が 4 つ以上の領域で困難を抱えているという深刻な状況がうかがえた。

D.考察

本研究の結果、SDQ の合計および下位尺度得点の平均の比較、上位 10%および 20%で切り取った高得点群の割合、さらには個人内で高得点を示した領域の広がりからも、ASD 特性が一定程度以上強い幼児では情緒、行為、多動・不注意といった全般的な精神症状が一定レベル以上の水準にあり、また広範囲にわたって困難を示していることが示された。これらより、通常学級に在籍する小中学生の全国調査で認められた結果（神尾ら、<https://www.jspn.or.jp/journal/symposium/pdf/jspn107/ss611-617.pdf>; 森脇ら、2013）は、就学前の 5 歳児においても同様に認められ、ASD

に併発する精神症状の出現はこれまで考えられてきたよりも早期である可能性が示唆された。

さらに、全般的な精神症状のリスクは、ASD の診断閾にある幼児のみならず、診断閾下群である幼児にも高いことが示され、場面や領域によっては、診断閾児とはっきりと区別できないようであった。全般的なメンタル面のリスク評価の際には、ASD 診断にこだわらず、一定以上の偏りのある児に対して、ていねいな包括的精神医学的アセスメントが必要とされていると考えられる。

また、臨床的な判断を適切に行う際には、評定者間の相違を把握しておく必要がある。今回、評定者間で比較はできなかったが、両者の回答はほぼ共通しており、評価の場面が変わっても、また評定者が変わってもほぼ安定した特徴を反映している可能性がある。しかしながら、厳密な一致度については今後、同一の対象児に対する両者の評定をペアで比較することで明らかになるであろう。

E.結論

地域の一般就学前 5 歳児は、その ASD 行動特性/症状の程度に応じて高い精神医学的ニーズを有することが明らかになった。診断閾下ケースを含む ASD 特性のある幼児に対して治療可能な精神医学的ニーズの早期発見のためには、包括的アセスメントを行う必要が強調される。

F.研究発表

河野靖世. 一般 5 歳児の ASD 傾向と精神医学的ニーズの関連. 平成 25 年度医学科第 4 学年自由選択(プロジェクトセメスター)成果発表会, 2014.2.21. 東京医科歯科大学医学科, 東京.

G.健康危険情報 なし

H.知的財産権の出願・登録状況 なし

表 1 ASD 3群の内訳

	保護者評価				担任評価			
	ASD Unlikely	ASD Possible	ASD Probable	合計	ASD Unlikely	ASD Possible	ASD Probable	合計
n	876	128	24	1028	296	43	8	347
	(85.2%)	(12.5%)	(2.3%)	(100%)	(85.3%)	(12.4%)	(2.3%)	(100%)

表 2 SDQ 各下位尺度の平均値と標準偏差

	保護者評価						担任評価					
	ASD Unlikely (n=876)		ASD Possible (n=128)		ASD Probable (n=24)		ASD Unlikely (n=296)		ASD Possible (n=43)		ASD Probable (n=8)	
	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)
SDQ 情緒	1.24	(1.42)	2.73	(2.13)	3.79	(2.72)	1.25	(1.70)	3.09	(2.59)	4.13	(3.36)
SDQ 行為	1.65	(1.40)	3.08	(1.76)	3.38	(2.32)	0.93	(1.40)	2.30	(2.05)	3.00	(2.88)
SDQ 多動不注意	2.57	(1.88)	4.75	(2.16)	5.88	(2.44)	1.75	(1.91)	4.81	(2.68)	6.50	(2.07)
SDQ 仲間関係	0.98	(1.08)	2.51	(1.84)	4.50	(1.38)	0.70	(1.07)	2.88	(2.07)	4.88	(1.55)
SDQ 向社会性	7.17	(1.87)	5.89	(2.02)	4.63	(2.78)	7.09	(2.32)	3.95	(2.64)	3.13	(2.23)
TDS	6.45	(3.80)	13.07	(4.84)	17.54	(5.32)	4.63	(4.02)	13.09	(4.45)	18.50	(4.99)

TDS(Total Difficulties Score)は情緒、行為、多動不注意、仲間関係の得点を合計したもので、全体の困難さを表す。

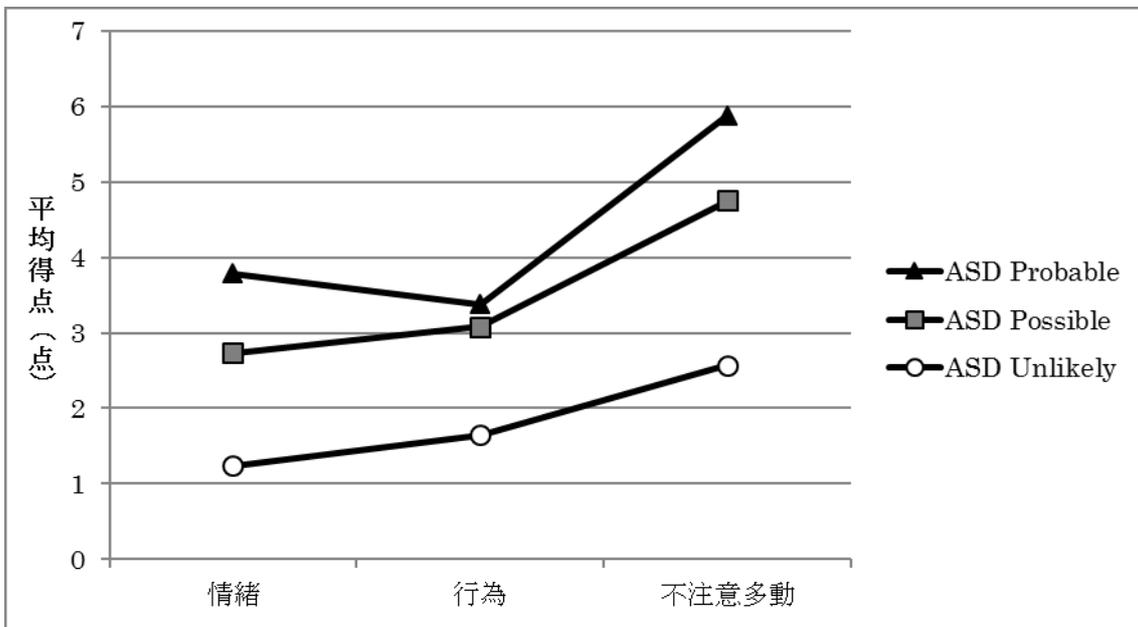


図1 ASD-3 群別のSDQ 下位尺度プロフィール (保護者評価)

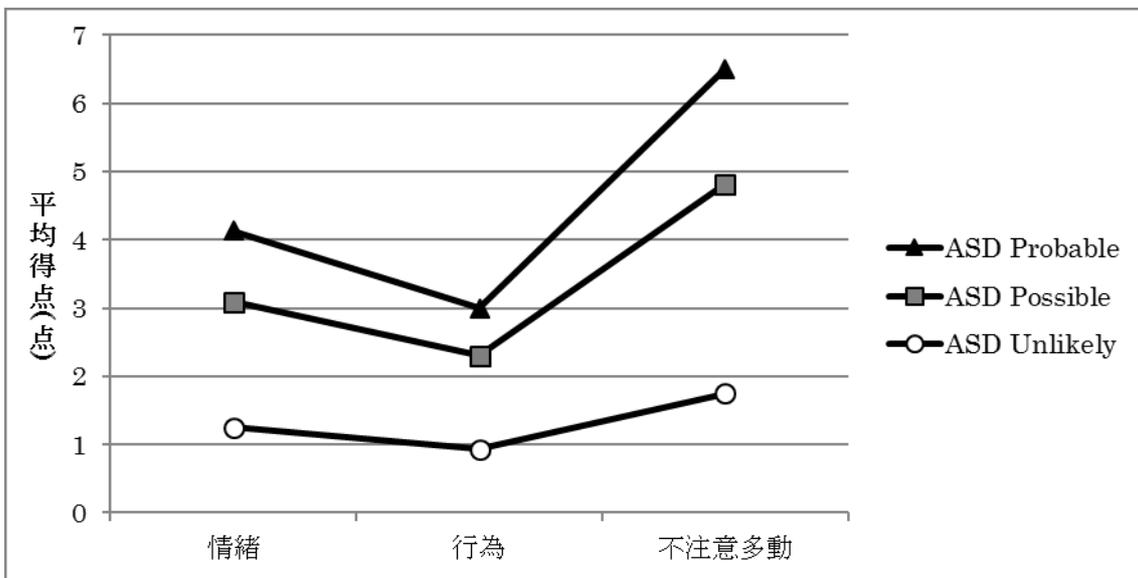


図2 ASD-3 群別のSDQ 下位尺度プロフィール (担任評価)

表3 SDQ 各下位尺度とTDS 毎のASD3 群別のSDQ3 群の度数と割合

			保護者評価			担任評価		
			ASD Unlikely (n=876)	ASD Possible (n=128)	ASD Probable (n=24)	ASD Unlikely (n=296)	ASD Possible (n=43)	ASD Probable (n=8)
情緒	SDQ3 群	Low Need	726 (82.9%)	65 (50.8%)	10 (41.7%)	242 (81.8%)	21 (48.8%)	2 (25%)
		Some Need	83 (9.5%)	25 (19.5%)	4 (16.7%)	28 (9.5%)	7 (16.3%)	3 (37.5%)
		High Need	67 (7.6%)	38 (29.7%)	10 (41.7%)	26 (8.8%)	15 (34.9%)	3 (37.5%)
行為	SDQ3 群	Low Need	745 (85%)	61 (47.7%)	12 (50%)	216 (73%)	19 (44.2%)	3 (37.5%)
		Some Need	77 (8.8%)	28 (21.9%)	3 (12.5%)	60 (20.3%)	11 (25.6%)	2 (25%)
		High Need	54 (6.2%)	39 (30.5%)	9 (37.5%)	20 (6.8%)	13 (30.2%)	3 (37.5%)
多動不注意	SDQ3 群	Low Need	743 (84.8%)	63 (49.2%)	7 (29.2%)	262 (88.5%)	18 (41.9%)	1 (12.5%)
		Some Need	86 (9.8%)	26 (20.3%)	6 (25%)	15 (5.1%)	11 (25.6%)	1 (12.5%)
		High Need	47 (5.4%)	39 (30.5%)	11 (45.8%)	19 (6.4%)	14 (32.6%)	6 (75%)
仲間関係	SDQ3 群	Low Need	718 (82%)	57 (44.5%)	1 (4.2%)	271 (91.6%)	21 (48.8%)	0 (0%)
		Some Need	106 (12.1%)	32 (25%)	3 (12.5%)	16 (5.4%)	8 (18.6%)	1 (12.5%)
		High Need	52 (5.9%)	39 (30.5%)	20 (83.3%)	9 (3%)	14 (32.6%)	7 (87.5%)
向社会性	SDQ3 群	Low Need	691 (78.9%)	73 (57%)	11 (45.8%)	258 (87.2%)	20 (46.5%)	2 (25%)
		Some Need	129 (14.7%)	25 (19.5%)	4 (16.7%)	21 (7.1%)	8 (18.6%)	2 (25%)
		High Need	56 (6.4%)	30 (23.4%)	9 (37.5%)	17 (5.7%)	15 (34.9%)	4 (50%)
TDS	SDQ3 群	Low Need	748 (85.4%)	40 (31.3%)	1 (4.2%)	267 (90.2%)	10 (23.3%)	0 (0%)
		Some Need	75 (8.6%)	33 (25.8%)	3 (12.5%)	16 (5.4%)	9 (20.9%)	1 (12.5%)
		High Need	53 (6.1%)	55 (43%)	20 (83.3%)	13 (4.4%)	24 (55.8%)	7 (87.5%)

表 3 SDQ 各下位尺度とTDS 毎のASD3 群別のSDQ2 群の度数と割合 (保護者評価)

			保護者評価					多重比較検定		
			ASD Unlikely	ASD Possible	ASD Probable	χ^2 値	p 値	Pro-Pos	p 値 Pos-Un	Pro-Un
			(n=876)	(n=128)	(n=24)					
情緒	SDQ2 群	Low Need	726 (82.9%)	65 (50.8%)	10 (41.7%)	85.6	0.000	0.412	0.000	0.000
		Some & High Need	150 (17.1%)	63 (49.2%)	14 (58.3%)					
行為	SDQ2 群	Low Need	745 (85%)	61 (47.7%)	12 (50%)	109.3	0.000	0.833	0.000	0.000
		Some & High Need	131 (15%)	67 (52.3%)	12 (50%)					
多動 不注意	SDQ2 群	Low Need	743 (84.8%)	63 (49.2%)	7 (29.2%)	122.6	0.000	0.071	0.000	0.000
		Some & High Need	133 (15.2%)	65 (50.8%)	17 (70.8%)					
仲間関係	SDQ2 群	Low Need	718 (82%)	57 (44.5%)	1 (4.2%)	152.1	0.000	0.000	0.000	0.000
		Some & High Need	158 (18%)	71 (55.5%)	23 (95.8%)					
向社会性	SDQ2 群	Low Need	691 (78.9%)	73 (57%)	11 (45.8%)	40.3	0.000	0.311	0.000	0.000
		Some & High Need	185 (21.1%)	55 (43%)	13 (54.2%)					
TDS	SDQ2 群	Low Need	748 (85.4%)	40 (31.3%)	1 (4.2%)	256	0.000	0.006	0.000	0.000
		Some & High Need	128 (14.6%)	88 (68.8%)	23 (95.8%)					

表 4 SDQ 各下位尺度とTDS 毎のASD3 群別のSDQ2 群の度数と割合 (担任評価)

			担任評価					多重比較検定			
			ASD Unlikely	ASD Possible	ASD Probable	χ^2 値	p 値	Pro-Pos	p 値	Pos-Un	Pro-Un
			(n=296)	(n=43)	(n=8)						
情緒	SDQ2 群	Low Need	242 (81.8%)	21 (48.8%)	2 (25%)	34.5	0.000	0.269	0.000	0.001	
		Some & High Need	54 (18.2%)	22 (51.2%)	6 (75%)						
行為	SDQ2 群	Low Need	216 (73%)	19 (44.2%)	3 (37.5%)	18.1	0.000	1	0.000	0.041	
		Some & High Need	80 (27%)	24 (55.8%)	5 (62.5%)						
多動 不注意	SDQ2 群	Low Need	262 (88.5%)	18 (41.9%)	1 (12.5%)	78	0.000	0.231	0.000	0.000	
		Some & High Need	34 (11.5%)	25 (57.1%)	7 (87.5%)						
仲間関係	SDQ2 群	Low Need	271 (91.6%)	21 (48.8%)	0 (0%)	94.8	0.000	0.015	0.000	0.000	
		Some & High Need	25 (8.4%)	22 (51.2%)	8 (100%)						
向社会性	SDQ2 群	Low Need	258 (87.2%)	20 (46.5%)	2 (25%)	56.1	0.000	0.44	0.000	0.000	
		Some & High Need	38 (12.8%)	23 (53.5%)	6 (75%)						
TDS	SDQ2 群	Low Need	267 (90.2%)	10 (23.3%)	0 (0%)	137	0.000	0.329	0.000	0.000	
		Some & High Need	29 (9.8%)	33 (76.7%)	8 (100%)						

表 5 Some or High Need の領域数と児の累積相対度数(%)

Some or High Need の領域数	保護者評価			担任評価		
	ASD Unlikely (n=876)	ASD Possible (n=126)	ASD Probable (n=24)	ASD Unlikely (n=296)	ASD Possible (n=43)	ASD Probable (n=8)
4	1.6	23	37.5	2.3	23.3	62.5
3	8.3	50.8	79.2	6.0	58.2	87.5
2	22.8	80.2	100	19.9	86.1	100
0	100	100	100	100	100	100